
明日のススメ

ウラノス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日のススメ

【著者名】

ウラノス

【Zコード】

Z5436D

【あらすじ】

出会いはビンタ。あなたは年上。いいことなくて、忙しくて、楽しいけれど繰り返し。そんな今日のサヨナラは、泣くほど愉快な明日だった。いつもを超えて、昨日を飛んで、ひたすら明るくまつりと。初めてだらけの大好きに、空飛ぶ心とホットコーヒー。好きだと言いたいこの時が、僕とあなたのラブ・コメディー！

～田舎このたぬのO&A～（前編）

えー恋愛ものです。

まだ始まつてないので・・・後書きで・・・

～出でてのためのQ&A～

毎とは言えないけど、夕方とも言えないそんな時間の土曜の休み。
かつてことは言えないけど、かつて悪いとも言えないそんな男が
一人。

窓から差し込む日差しを浴びながら、ゆっくりと本を開く。

・・・昨日買った古本ですが。

そんな感じでもある『今日』の真ん中で、最高に最悪な『明日』
と出合った。

・・・少しザッハーホーフアカト。

BGMに乗りながら、タイトル「ホール・・・

【明日のススメ～出会いのためのQ&A～】

Cast :

菖蒲 今日一 KYOUTI SHOB

労人@お人好しメガネ
翌檜 小春 KOHARU ASUNARO

ビンタ@適齢期だヨ!

菖蒲 紗綾乃 AYANO SHOB

菖蒲 紗綾乃 KYOUTI SHOB
「ン@兄魂ですが？」

菖蒲 紗綾乃 AYANO SHOB
「ン@兄魂ですが？」

竜胆 祭 MATURI RINDOU

親友@ア、アニキ

雛菊 瑞璃 RURI HINAGIKU

親友@僕男なんだよ・・・

紫苑 辰巳 TATUMI SION

スター@たつちゃん

マ

輩@イマドキ華の元お水

柏 由紀 YUKI KASIWA

マ

作者@

URANOSU

がんばります！
ウラノス

STAFF :

「うおー」

「ん?」

バシンツ

始まりは、ビンタからで。

～出處ごとのためのQ&A～（後編）

えーわかつたとは思いますが、登場人物にはそれぞれ花？の苗字を付けています。それぞれ花言葉にあわせてあるので、毎回紹介していきます！

Q1-1・出版物の準備って何があつますか？（前書き）

- ・・・サブタイトルがまだ定まっていません
- Qなのに？つけてないですし・・・たぶん変わるかもしれません。

Q1・出発前の準備って何がありますか？

彼女・・・翌檜 小春（25）の朝はいつもどうの気だるい目覚めから始まつた。

「ああ・・・気持ちわりい・・・頭いてえ・・・」

昨日しこたま飲んだ酒にクリーンヒット。人生何度目かもわからな一日酔いに苦しむ。

それでも無理やり体を起こす。今日は月曜日・・・英語で言つならマンデー。週明けのお仕事が始まる日だ。

ヴーーー、ヴーーー

タイミングばっちりのところで携帯が鳴る。現在7：30。小春は毎朝目覚ましとの仁義なき戦いに競り勝つてきた。

いわく、何かに起こされるのが途方もなく嫌いなのだと。まあ知つたこつぢやない。

体を引きづりながら顔を洗い歯を磨き食パンを生で食べながら新聞に目を通す。いつもの光景、なんだかおっさん。

食事が終わつたら薄く化粧・・・ほとんど口紅（淡いピンク・一本のみ）だけをし、適当に選んだ服に腕を通す。

8：20。鍵を閉め、バス停へ。一日酔い現在進行中。ドアを閉める音に切れる。

8：36。バスが到着し、乗り込む。窓際確保！…といつよつこの席はほとんど彼女の指定席化。暗黙のルールだ。

9：00。会社に到着。

「おはよーひーやーこーす先輩！…」

「あああー…わけぶんじやねえ！頭に響く！」

元気には彼女にあこがれするのは柏 由紀（23）。昔はお水の花道を駆進していたが、何を思ったのか〇〇に転向。そのままマイウェイを駆進する小春の後輩だ。

「ええー？もしかしてー一日酔いですかい？」

もちろん元・お水だけあってお酒に強い・・・といつよつ一日酔いがない。

「もしかしなくてもそうだよー！」

首をかしげたままケラケラと笑う彼女が憎たらしくてしようがない。ちきしきょうー昨日一緒に飲んだつてのによー・・・そう顔に書いたまままた歩き出す。

よく晴れた冬の空の真向からけんかを売るかのよつなどす黒い雰囲気をバンバン出しながら。

由紀はそれを肌に感じながら・・・

「ふつ・・・ふふふつ・・・せんぱーい・すいーい不景氣な中年サ
ラリーマンみたいなオーラがこじみ出でますよ?・ふふつ」

まわりのすいーい不景氣な中年サラリーマン達がぬう・・・とこう顔
をしているのもまつたく知らん振り。

そのまま小春をおつて走り出す。

それはいつもどおりの日常。あと五回繰り返す毎日。味氣のない、
ただぐるぐると回る繰り返し。少なくとも、小春にとっては・・・
だが。

彼・・・菖蒲 今日一(一八)の朝は遅い。

昔は4:00には起きて新聞配達のバイトと朝食に弁当の準備。そ

れが終われば学校。学校が終わるとそのまま喫茶店でバイトをし、夜はこれまたさまざまなバイトをシフトと相談しながら掛け持ちしていた。

人は今日一のことを苦労人と呼ぶ。

それには理由があった。

今日一には両親がいない。彼が6歳の時に交通事故で死んでしまったからだ。

まあ両親ともギャンブルやら酒やらに浸りこみ、子供の面倒をほとんど見ないようなような最低の人間だったのだが。

まあ借金がなかつたのは、奇跡とも言えよう。

そんな両親の人となりのせいか、まだ幼い今日一とその妹菖蒲 紗乃（16）を引き取つてくれる親戚もなく、そのまま施設に預けられることになる。

だがその預けられた施設というのが運の悪いことに経営不振に加えて虐待が問題になつており、結局今日一と綾乃是10歳の時に逃げ出でしまつた。

それ以来、かつての両親の友人であるという人から部屋を借り、少しの援助を借りながらバイトと内職（兄がバイト、妹が内職）で生きてきた。

高校には私立高校に奨学で通り、授業料免除で通つた。もちろん妹もだ。

このまま大学にもいかず、さあ就職でもするかな・・・といつある冬の日に、苦労して苦労してきた今日一に奇跡がやつてくれる。

なんと今日一の両親がたくさんの土地を持つてていることが発覚したのだ。まあだからあの両親に借金がなかつたわけだが。

親戚たちも今日一たちを引き取らなかつた手前、今更所有権やらを持ち出せずにほぼすべてを引き継ぐことができたのだ！オオイエイ！！

まあ昔と変わつて物価の上がつたため、それだけで食べていけるわけではないのだが、以前に比べ今日一と綾乃の暮らしあざいぶんと人並みに近づいた。

おかげで今日一は進学することができ、推薦入試で1月のうちに近くの某有名大学への進学を決定。そのまま高校生でもないが大学生でもない暮らしを送つていた。

「ンンン

「おい綾乃ー学校に送れるぞー」

「「」「」めんお兄ちやんっ！」

ドアを勢いよく開けて今にも転びそうなくらいの足の運びで飛び出してきたその少女は、天使のよつたな顔を申し訳なさそうに垂めながらお兄ちやんと呼んだ男に誤つた。

真黒の髪をかわいくミニアムボブで切りそろえたかわいらしい彼女の名前は菖蒲 紗乃。

そして勢いよく開いたドアと衝突しそうになつて慌ててよけようとしたものの、すんでのところで鼻にかすつてしまつたあと一步が足りない感のある彼の名前は菖蒲 今日一。

一人は最初に暮らしだしたアパート（一Kトイレ・風呂共同）を15歳の時に出て、いまは某県某所にあるマンション（2Kトイレ・風呂別）に暮らしている。これで家賃が2万5千円というのは、今日一の働いている喫茶店のマスターのおかげだった。

つとそれより！

「・・・大変！遅刻！！」

「もお！なんですぐに準備しないの？」

「なんか説明的なものをしていたから・・・」

「誰が？僕は聞こえなかつたけど・・・」

「ん？ そつ言えば誰？」

あ、私です

「ひひそれより早く準備しないとーほひ、朝ひははんサンディッシュだからバスの中で食べな

そひこひで今日一は弁当とは別に袋を渡した。

「あひがとーかやんと食べるよー」

そひこひトニ「ひ」と笑う綾乃の笑顔は、まるで・・・ってなんかた
とえぬものがなこくらこ脳しかつた。

「お兄ちやん・・・行つてきまゆのあひはー・

「つまめん」

「・・・こひもじてくさるのこひ

「アヒこひ誤解を招くよひなことを言わなによ。ほひこひとこでー
ほんとに遅れちやひー・

「わー・・・やほこーつヒー・アヒこべばお兄ちやん今日学校来るー・

「あ・・・面前ひるひは出しへ行へよ

「わかつたーじやこひよじい飯食ベよー・

「ほーこひてあまーす

「二つめのことをやる。販売するんだからー」

こんな畠田。たぐわこの勘定の上に成つたのは繩ただしてカギ
をついた今日。

こんな田がずっと続く。事件もなへ、ゆくへつと並へ田々。それで
いこと思つていた。

それが今日だとおもつてこた。

続く

Q1・出合づ前の準備つて何があつますか？（後書き）

え～まずは、今日一と小春の由来から！

【瞳菖蒲】

花言葉 優しい心 忍耐 貴方を信じます 優雅な心

アヤメ科 アヤメ属の多年草

別名 ジャパニーズ・アイリス

原産地 日本

花色 白 黄 オレンジ 紫 青と多色ある

開花 5月～7月

草丈 40cmから120cm

花持ち 1週間

凛とした姿から騎士の花と呼ばれています
これはけつこうハマつてゐると思ひます。

【翌檜】

花言葉 不変の友情・不死・不滅・すこやか

ヒノキ科

別名 ヒバ

原産地 日本

葉 濃緑色で光沢があり裏面は白色の気孔線が目立つ

開花 常緑高木

樹高 20m

なんとな一く明日とあすなるをかけてみました。

まあ不滅の愛か、友情か・・・

また瞳菖蒲よりもはるかに大きい・・・。そして瞳菖蒲は騎士と呼ばれてい

れているというところにも注目してみました。

ではまた。

Q2・出張にて実感がない壁つらさはありますか？（前編）

えーサブタイトルに苦しみます。

どうもー

Q2・出会いで実感がない時つらがりますか?

そんな毎日繰り返しでも、週に1回の楽しみはある。

その日、小春は毎回から飲んでいた。

理由は簡単。友人の結婚式だ。

まあすでに2次会なんだけど。

「ちくしょーつこれがぬおまずにいられるかー。」

「ああん先輩! 飲みすぎじゃないですか?」

その友人は、小春の勤めている会社の同期であり、もちろん由紀も呼ばれてくる。

「どうおこつもくおいつも結婚だあ寿退社だあつて・・・

「あら? セニで嫉妬ですか?」

「ちげえ! 別に誰が誰と結婚しようと関係ねえ! 私が結婚できないのがなんか嫌なんだ!」

「・・・」もつともパート2

「・・・結婚なんてあんまいもんでもないですよ?」

そう言つと由紀はつまみかけの枝豆で遊びながら、2杯目のチュー

ハイ（すでに生ジョッキ3杯、焼酎1杯）をくつと飲み干した。

「それでもだよおー」

今まで恋愛沙汰にはそこまで興味がなかつたが、25にもなつてみれば、少しは意識をしてしまう。

「ん、その前に恋人作んないと…ですねえー」

「せりや私だつて付き合つたことぐらこあるわ」

昔…といつても高校時代、小春はたくさん告白されたつむの人に試しに付き合つたことがあった。

初めてのデートにドキドキしてみれば…そのあまりのつまらなさに、小春は驚愕したものだった。

前に友人たちとみた時は、あんなに面白かつた映画の続編も、（その…まあ一応）彼氏とみたらとんでもなく面白くなかった。えて言つならつまらなかつた。

そのあとビデオで借りて見たら、すく面白かつた。

それから、なんとなく恋愛にたいして抵抗…というか、まあそれに近いものができてしまった。

以来ずっと恋をしてこなかつた。

それでも焦るものは焦る。もう25だ。いくら世間が晩婚化でも自分にとつては大問題だ。加えて親も最近つるさん言ってくるし…。

「あああどうすりやいいんだよお・・・」

そう言いながら芋焼酎をぐつと煽る。

それを見ながら由紀は、遊んだ枝豆を食べながらにやりと笑いつつ言った。

「まずは初体験からですね～はー」

入れて いる。

「 ウィンナー・ ハービーとペザースト・ ・ ・ と牛丼特盛り」

「 ん～ カフェ・ ラテと季節のパスタ！ 大盛りでね」

「 かしこまりました・ ・ ・ 少し待ってね」

「 わかった～ まつて る～」

「 つーかおまえら そんなに 食つ の？」

「 おーおー・ ・ ・ 育ち盛つとは言わねえけど、 それでもおれり高3
だぞ？ 坊主が食わなきゃ さがるだけだよ」

「 そうかな？」

「 そつだよと 言い残し、 今日一が淹れた ウィンナー・ ハービーを 一口。

「 こいつの なまえは～ 竜胆 祭18歳～い」

「 誰に 説明して んだ？ 雛菊 瑞璃5歳」

「 僕は18歳だよ～！ ～！」

・ ・ ・ ウィンナー・ ハービーを ハサペザースト 齧つて こる 長め

の茶髪のイケメンの名前は竜胆 祭。

こう見えて陸上界では昇り龍と呼ばれ、ハイジヤンの高校記録を持つているほどの男だ。

しかも喧嘩も強く面倒見もいい、今日一達にとつては兄貴的な存在。まあ外見がアレなのと喧嘩で学校じゃ浮いてしまっているが、本人にしてみれば本当に心を許せる親しい友人が何人かいればほかはどうでもいいらしい。

色々なバイトを紹介してもらつたり、少し家を空けるときに綾乃に料理を教えてもらつたりと、本当に今日一ひとつては頭の上がらないやつだ。

その隣でカフフ・ラテのカップを両手で抱えてちびちびやつてる小柄で金色の長い髪を後ろで結つた・・・言いたくはないが女の子のように見えなくもない、というよりそれにしか見えないようなお・と・この名は離菊 瑞璃（これまた女の子の名前）。

小さなころから絵が好きで、本格的に始めたのは高校の美術部に入つてから。

芸術の才能の塊のような奴で、漫画から油絵、水彩画など様々なジャンルに手を出している、いま世界で注目されている画家さんだ。

まあ性格においては前衛芸術のようなもんだが。

「説明終わつた？？」

「もちよーい

「さつさとすませひ？飯がはじまんねえ」

おく！

そんなふたりは、祭は陸上で、瑠璃は芸術で今日一と同じ大学の推薦を通つている。

まあ仲良し3人つてところだ。

「・・・ちょっとまつた。私を忘れてる

あと綾乃とも親交が深い。まあ綾乃はブラコンなのだが。

「いらっしゃい綾乃」

「よお綾乃。なんだ？土曜課外か？」

「うん。・・・大変だよ」

「はつはつは～普通科の僕とスポーツ科のマツリには分らない苦労つてやつだね～」

四人はいつもいっしょにいる。それがデフォルトと化しているくらいだ。

「そうだね～デフォルトだ～」

「意味わかつて言つてんのか？瑠璃」

「「「どうよりみんな誰と話してんの？」」

「「「わあ（ね）？」」

それから2時間、3人は今日一のバイト先である喫茶店【都忘れ】で牛丼食べたりハンバーグ食べたり騒いだりさんざんしたあと、嵐のよう而去つて行つた。綾乃は渋つていたが、いられちゃ迷惑になりかねないので帰つてもらつた。

とこうよりあいつらがたのんだ牛丼特盛りやらジューシーハンバーグやうは今日一がいるときだけに限つた幼馴染メニューではない。

列記としたこの喫茶店都忘れの裏メニューなのだ。

そもそもこの喫茶店の店長は様々な料理を本場で極めた鍋の料理人で、さまざまなレストランでのバイトで料理を会得していつた今田一とはレベルが違うお人なのだ。

まあその極めた先にまつていたのが喫茶店・・・といつのもどうなのだらうか。

ちなみに今日はハ戸まで究極の魚介類を探しに行っているのだが。

手音の時計ではもう5：38を指していた。

「今日は店長もいないし・・・客もこないし・・・たたむかなあー」

つと、店のテーブルで古本を読み進める今日一の耳に入つて来たのは店のドアの開くベルだった。

「うう～気持ちが悪い～」

「ちょっとおー先輩！」

振り返つた先にいたのは、顔を真つ青にしてもう一人に寄り掛かる黒髪の長い気の強そうな美人と、その美人に寄り掛かられる茶髪にウェーブのかかった可愛い感のある、やつぱり美人さんだった。

「あのーもう終わつたんですけど？」

「ええ～こまりますー！店長さんはーー？」

「いま食探しの旅でハ戸だそつです。帰りは明日ですよ」

「そんなんあー」

「由紀・・・もお・・・ダメかも」

「ちよ、ちよーとー店の中ではやめてくださいよー。こまバケツ持つてきますからね？」

そう言つてカウンター式の厨房に戻ろうとした今日一に、今気づきましたといった感じの氣の強そうな美人・・・小春は、いきなり肩をつかんだ。

「うおー！」

「ん？」

バシンッ

「ー？」

「てんめえ・・・しぃつ」いんだよー。うしがあうよおつぱりいだからつてえなあめんなよ?」

「先輩ー」の人はさつきのナンパやうじやなによー。」

「あああん?ううううだめ・・・もうだめ・・・

小春が発射5秒前の姿勢に入る。

「ああああああああーーちよつとまつてーー。」

すかさず今日一が光の速さでバケツを持って来る。

まさこ間ー髪ーすんでのとひりで間に合つたじ様子。

—『アラル』

バケツに向かつて発射している飲んだくれに一同人安心。

そのまま発車するだけ発射したら、口をゆすがせたあと速攻で眠ってしまった。

「アリス、おまえさん……」

そのすいませんにはビンタと発射と勝手に居眠りの三つの意味が含まれていた。

「ああ大丈夫ですよ。間に合いましたし。それに店長のお知り合いの方でしたらいつまでいらっしゃられてもかまいませんし」

「ニヤ、ビンタも・・・」

今日一のほつぺには、真つ赤な手形が残つていた。

「ああ・・慣れますから」

「えつ？」

「いや、酔払いの相手をするのが。ですよ」

「ああー、そうですね~」

はつはつはと笑いあう一人。隣でうつうつめきながら爆睡する一人。

結構シユールだ。

「バイトか何か？」

「はい。昼から夜までここでバイトします

「へえ～！大学何年？」

「いえ、今年から。ですね」

「ふーん！がんばってね」

「はい・・・あ、なにかお飲みになりますか？」

「ん～じゃキャラメルマキアートお願いできる？あとそこまでかし
「まつた敬語使われても困るから・・・普通でいいですよ？」

「はあ・・・わかりました。キャラメルマキアートと普通で。です
ね」

にこひつとして言つ今日一に由由紀は一瞬キョトンとしたが、すぐにけ
らけら笑いながらお願いします。と返した。

それから一時間、今日一と由紀は談笑していた。

「くえ～キヨウくんはまだ18なんだ～

ちなみに今日くんとは、由紀が

「今日一いつじこのへならキョウウ君でいいかな？」

と勝手に決められたあだ名だった。

「ええ。でも由紀さんもとても若く見えますよ？」

「つまこねえキョウ君はー。」

「ん~~~~~」

ガバッと顔をあげた小春は、妙におなかが減っていた。

「・・・マスターーーから揚げ定食にラーメン・・・」

「あー先輩起きたんですか?」

「うう~少し酔いのこじれるけどな~」

「お作りしましょうか?」

ん?とぼおつとした顔をあげた小春と、カウンターから尋ねる今日
一の眼が合つた。

それがファーストコンタクトだった。

まあ一方的に最悪だけどね。

続
<

Q2・出会いに実感がない時つむづむすればいいんですか？（後書き）

今回は、柏 由紀の由来です！

【柏】

花言葉 愛想のよさ、愛は永遠に、自由

植物 双子葉植物離弁花 落葉高木 ブナ科

学名 *Quercus dentata*

分布 北海道、本州、四国、九州

環境 丘陵地の森や林の中、山の森や林の中、公園や庭

花期 5～6月

結実期 10月

花の大きさ 10～15cm（雄花穂）

丈 10～15m

花言葉はぴったりですね。最初は董だつたんですけど・・・かえち
やいました！すません！

Q3・気がついたら普通なことになっていた時の対応策はなんですか？（前書き）

えーとムヤムクンです。

作者はあまり好きっぽいわけではありませんが、友人宅で食わされました。

意外においしいんですね～

Q3・気がついたら普通になつていた時の対応策はなんですか？

全てはあの日から始まつた……

と、今思えば的な発言をしてみる。

あの後、由紀によつて謝られた小春は、今度お詫びをするということですから揚げ定食ライス大盛りとラーメンをぺろりとたいらげた。

ちなみにこゝ、喫茶店です。

まあ最近やつと手に入れた今日一の携帯に最初に入った女性のメアドが小春だつたのは・・・ほら、ねえ？

その日、今日一は暇だつた。

綾乃是試合で祭は大学の陸上の練習（入学が決まつた時点で参加している）、瑠璃は絵の個展の初日で挨拶回り。

ここが忘れの休日の昼下がりのお客さんと言えば、この三人のほかには常連さんが4、5人いるのだがそれすら来ない。もう一時間は客足が途絶えている。

「ああ・・・なんか暇だな・・・」

古本ももう読んでしまつた。ちなみに『風と共に去りぬ（上下セットで100円・渋い）』と綾乃から渡された甘いラブロマンス小説

だ。

前者の方は感動したし、まあ後者の方は・・・顔を真っ赤にしながら一気に読みました。

「いいねえ。こんな恋愛してみたくもないけどな

どうちうすか?

カラソーロロン

「いらっしゃいますー」

「おひ

「あい

入つて来たのは冬物「ートを小粋に着こなした、いかにも働く女バリバリの小春さんだつた。

「カウンターとテーブルどつちになさいますか?」

「ん~一人だしカウンターで」

「はい、レジにどうぞ」

すつと椅子を引く今日一。まあ暇だからレジを行えるサービスだ。

「えりく空いてるな?もしかして私ひとりか?」

「ええ。お一人になりますね」

「おおおなんか貸切っぽいな！」

「クッ・・」

年柄にもなく（まだ25歳）子供っぽい小春に、今日一は吹きだしてしまった。

「なんだよ」

「いえ、知り合いが前に同じことを書いていましたので・・・」

言わずとわかる・・・瑠璃である

「すいません。『注文は？』

「ん～カプチーノとトマヤムクン」

「ありません」

ああー裏メニューにもないもの頬んじやつたよ

「食いたいんだ」

「ん～無理だと思いますが

「どうしても食べたい！」

「わかつました。少しお待ちください」

作れんのかよ！

「海老フライ用の奴と・・・今日のパスタのマッシュルーム・・・えええ！な、なんでナンバーがあるんだ？？」

調味料庫（古今東西なんでもいいやれ）の奥にひっそりと、しかしガンガン異彩を放つナンバー。

ついてるメモを見ると、『コーヒー研究には使えない』との文字が。

「使えるわけないよねー」

まあ助かった。さっそく調理へ。

トムヤムクンは2年前のタイ料理の店で習った本場流。というより今日一に作れない料理はほとんどないと言つても過言ではないのだ。

「先に、カプチーノをどうぞ」

「ああ・・・つうかえらく料理つまごのな？」

「まあ、バイトで鍛えましたから」

「（ズズツ）んー、んまい」

カプチーノの泡を口の周りにつけるといつ、瑠璃ですらジョークでわざとやるような高難易度ウルトラじを平然とやつてのけた、仕事はバリバリこなす適齢期の小春さん（25・女性）

「クッククッ」

「あんだよー。」

凄んでも口には茶色のハコハコなお髪。

まるで小さな子が母親にねだつてこるよりも見える彼女は、まあいいかと少し体を起こしてカウンターから鍋を覗いた。

「おつーつかそりだな」

そんな小春がとても可愛らしく思えて（初対面はビンタ＆発射）、今日一は紙ナップキンで口髭を拭つてあげた。

「むり・・・」

「つこてこましたからね」

「謝謝」

なぜかに中国語？？といつのは置ことここで、そういうのをアテにしつけていた。マヤムクン作りはこよに佳境に差し掛かってきた。

あとは隠し味の「ナナツミルク（紅茶用）を入れて、ナンパラーで風味づけ。レモンを絞つてできあがりだ。

店につぱこにエスニックな香りが広がる。

「おまたせいたしました。トムヤムクンですよ」

「おお！ いただきます」

黙々とトムヤムクンを啜る小春に、作った方の今日一はうれしくなつた。

まあ今日一が隨所にほどいしたひと工夫に『気づく』とは最後までなかつたが。

「なんか殻なしの海老つべづつめくへ見えるよな」

・・・あなたが食べやすいよう元わざわざだしを取つた後剥いたんですね」とせきえな。

時としていつこう時もあるのだ。

「ふーっー、うまかったー。」いつせきえだした

「 ものの5分で熱々のトムヤムクンをたべらざりてしまつた。

「 むやまつせきえです」

そのまま皿を洗いだす今日一を、満足した顔で見る小春。

メガネから覗く優しそうな瞳に、不覚にも少しだキッとしてしまつた。

「なんですか？」

ん？とこつ顔でじつひを向かれて、困る小春はそっぽを向く。

「クスッ またついてますよ」

ほつぺの上についた赤いスープをこれまで紙ナプキンで拭う今日一。
じゅやつてついたんだよ

うつ・・・か、カムサハム二ダ」

なぜ韓国語！？

カラ・・「カラソンコローネン」

お口で登場由来をうなづく

「ナメニサシハヒル」

「おはよう」

「おこりす」

「ナニカヘルモー・ホーリー・ツナギ」

「ぼ、僕もですか？」

「はい、おこづか

「おい・・・「なんだよ由紀、」私の美貌に会いに来たのか?」
・・・
・グスン」

「はい、実は先輩の顔を忘れてしまつて・・思い出すために見にきました」

「なに？ ショックで忘れるほど美貌だと？」

「はい。あまりのショックでアレルギーが起きました」

「ハツハツハツハ！ 腕をあげたな」の野郎！」

ガバッヒヘッドロックをかける小春に

「ああー先輩のナイチチに顔が当たるーキヤー」

と、ケラケラ笑いながらもがく由紀。

「ナイチチつていつのネタなんすか・・・」

「むうつー私はまだ23ですよー！」

小春にロツクされながら睨まれてもね・・・

「」注文は？

「んーカフェ・ラテのエスプレッソ多めでー」

「かしこまりました。小春さんはおかわりになりますか？」

「ああ・・・少し汗かいたからアイスティーのストレート」

「少しおまかせください」

そつまつて、バーの豆をエスプレッソマシーンにかけはじめる。バーの香りがまた店内にしみわたつていぐ。

「どうか先輩、さつき何食べたんすか?」

「ああ、トムヤムクンだ」

「なんかアジアっぽーいー」

「それっぽい範囲が大きいですね」

「といつよつ先輩言つたんですか?」

「はい、カフュ・オレとアイスティーのストレートになります。」

「なんのことだ?」

アイスティーをチューリップ飲みながら尋ねる小春

「お詫びのバーのお誘い」

ブバツ

「うわああつ

「あらあら？顔射？」

「ゴホッゴホッ・・・そういうことを平然と言うな！」

「すいませーん」

顔面に紅茶を吹き付けられた今日一さん。それでも冷静にタオルで拭つて机を拭いてるあたりは、さすが場数を踏んでるだけのことはある

「テ、データですか?」

卷之二

「誰と誰がだよ」

「 せじや 」

カランコロン

「綾乃君、十枚持つて行きなさい」

「祭師匠！もう座布団がありません！」

ああ・・・力オスに染まつていいく・・・

続
<

Q3・気がついたら普通になつていた時の対応策はなんですか？（後書き）

それじゃあ今日は、竜胆です。

【竜胆】

花言葉 正義、さびしき愛情
科名 リンドウ科
属名 リンドウ属
園芸分類 多年草
原産地 日本
花期 8月～11月
用途 花壇、鉢植え

昔は漢方等に使われていたといつきれいなお花。

花言葉的にはドンペリシャですね。まあさびしきの意味も気になりますが・・・

次回は雛菊です　お楽しみに～

Q4・大事なことはいつも最初に言った方がいいですか？（前書き）

世界シリーズだ！ドン・さらに倍！
テンションあげていかないと、なんだかマンネリ化（はやくね？）
しそうなので・・・

Q4・大事なことはいつも最初に言った方がいいですか？

あの後のことは、もう今日一の中では忘却の彼方（にしょ「つと」锐意努力中）だ。

書いちやうと一話分位になつちやうので割愛。機会があれば、また。まあ大まかに言つと、嫉妬の鬼と化した某妹さんの瘴気に当てられて某江戸っ子〇さん対抗。喫茶『都忘れ』は一時冷戦下のミサイル警報の出たアメリカ軍基地のような空気になつてしまつた。

あとは瑠璃の実は男の子です発言と妙に幼馴染』うと仲良くなつた由紀さんなどなど……である。

「あれは大変だつた……つて……また思い出しちやつたし……」

あ、『めん

まだまだ寒さが胡坐をかきながらお茶を啜つてゐるような、そんな冬の平日の午前10時。

喫茶『都忘れ』はいつにもまして静かだつた。といつより密足が途絶えていた。

そもそもが、ここ都忘れは商店街【阿頬耶坂】から一本脇に入った、いわゆる裏道という場所にあり、若干常連客中心の隠れた名店のような感じなのだ。

だから必然的に平日のランチタイムや休日の午前から過ぎ以外は
お客様が少なくなってしまう。

そんな、いつもの風景。

「・・・グスツ いい話だねえ」

じゃないんだなあ

お店の中で一番当たりのいい席を陣取つて感動に浸つているのは

小春だつた。

「ティッシュの使いすぎは勘弁してくださいね。はい、カプチーノでよろしかつたですか？」

「ズズツ・・・ああ、ありがとう。この本、由紀の奴に勧められたんだけぢや。泣けるんだよなあ・・・グスツ」

彼女が読んでいるのは、絵本の【百万回生きたねこ】だつた。

いや、たしかに泣けるいい話だけぢや、二十過ぎた後輩が先輩に勧める本か？そこはかとなく子供扱いしてね？

「ああ、その本僕も感動しました。妹に読んでるつちに、僕まではまつちやつて」

一人の間には、ほんのちょっとぴりのセンチメンタルがあった。

「・・・といつより、お仕事は？」

流れる空気を一気に切り捨て、尋ねる。多かれ少なかれ由紀の真意（子供扱い）に

今日一も感じていたのだ。

「ああ、この一週間会社にこもつてたんだよ。だからその分の休みをな。まあ徹夜明けの朝からなんだけど。でもおまえだつてなんでこんな時間にいるんだ？学校じゃねーのか？」

本をおいてミルクティーをすすりながら尋ねる。

「僕は今日は学校があつませんから。入試は終わりましたし」

「ふーん」

さして興味はなかつたらしい。少しの沈黙が間を挟んだ。

「なんか腹減つたなー」

あらかさまな棒読みで宣言する小春。

彼女だつて空氣を読むのだ

「なんにします?」

まあトムヤムクンを作れたんだからなーと、今日一は考へていた。
そう、この時までは・・・

「じゃあナシゴレン」

「無理です」

「トム作れたなら作れんだろう?」

トムつて・・・なんか人みたい

「ナシゴレンつて・・・」

「食いたーい」

「中華鍋があるんだよなー。ああ・・・もう作りますよ」

少しのため息、冷蔵庫のなかを捜索開始。

見つけたシーフードミックス（海のパスタ用）を炒めながら卵を溶き入れる。

「ナシゴレンって、なんだ?」

「え? 知りずに注文したんですか?」

「なんかアジアなのは聞いた気がするんだけど」

「・・・インドネシアの、まあ焼き飯みたいなものです」

「ああ、インドネシアなら行つた」とあるが、出張で、だけど

そつこひ話をしながらも、やつぱり手はせわしなく動く。

「わつこえは、インドネシアとこえばジャワティーありましたね。お出ししましょうか?」

「ああ、お願こするがえー!」

ちなみに、裏メニュー料理は時価である。この前のトムヤムクンは450円。ナンブラーは喫茶店には必要ないのだ。

手慣れた手つきで紅茶を入れる。

「ホットでいいですよね?」

「おー」

「どうのお飲みになりますか？ミルクとストレートがおすすめですけど」

「もちろんミルク！」

なにがもうひんなのかは、このせい置いたました。

中華鍋にご飯を入れ、その隣でポットとカップを温める。

オタマでかき回しながら、やかんの熱湯を茶葉を入れたポットに注ぎ込む。

そのまま紅茶を蒸らしながらナシゴレンの仕上げに入る。

味を調えた後皿に盛り、半熟の玉玉焼きを盛りつけ蒸らし終わった紅茶をカップに注ぎ・・・

フウ。

そのまま冷たい（ごだわりー）ミルクを少なめに（ごだわりー）そぐ。

ちなみに紅茶を濃い皿に淹れるのがごだわりーだ。

「はい、ミルクティーのジャワとナシゴレンになります」

両方とも熱々の状態で。

「いっただつきまつす」

まずはナシ「レンをかき」みだす小春。

ん~ワイルド

「んめえ~おまえよくこんなマニアックなの作れんな?すこ~いぞ~」

「前にバイトで作ったことがあるんでね」

ガツガツガツガツガツガツガツガツガツガツ

「んまかつた!」

ほんとに・・・なんといつか、キレイに食べきる小春。

少しあめた細部にまでこだわりぬいた紅茶をズイッと飲みほしあまりのプハー。

「！」ハ老子ん

「どうせー」

「その、あのな」

「ん?なんですか?」

「あ、ママッ」という顔を作り、皿を洗つ今日一を見つけるよつに見てくる小春。

「あ、明日定休日なんだろ！」

「ああ、すいませんね。店長が今度は松坂牛の踊り食いとかでまた旅に出ひやつたので」

「ここ都忘れは、あまりに定休日が不規則だ。

とこりうか、もうもはや定休日じやない。

「いや、やうじやなくてだな・・・」

「？」

「ゆ、由紀の奴がな、その・・・おまえをで、でーとこ・・・」

顔を真つ赤にしながらもる小春。

さあ、言つんだー言つちまうんだー

「あ、黄身つこてますよ」

グイッと紙ナフキンで口元をぬぐつ今日一。

「あ、う、ダンケ」

今度はドイツ語だい！

「・・・また言えなかつた・・・」

「？」

「つか、なんで誘おうとしたんだ？あたし
そこがいけへ。

つか

Q4・大事なことはいつも最初に言った方がいいですか？（後書き）

ついに今回は、雛菊です！

【雛菊】

花言葉	無邪気、希望、無意識、平和、明朗
別名	デイジー、延命菊、長命菊
科名	キク科
属名	ベニス属
原産	ヨーロッパ
花期	初春～秋
園芸分類	多年草

いい選択だと私は思つております！

祭、瑠璃、由紀、小春の全員にきちんと昨日（過去）を用意していますので、そこら辺を出せたらな～と思ひます。

新しいキャラクターはもつすぐ出したいたいと思ひます。話に合わせて、結構重要？なのもでてくるかもしれません。なにぶん初心者なものでこうこうが今一つかめなくて・・・。

必死こいて考え中なので、お楽しみに！

Q5・もしもの時って誰かに頼りちゃいけませんよね？（前書き）

えー。

なんというか、次回への布石？みたいな物かもしれません。

Q5・もしもの時つて誰かに頼っちゃいけませんよね？

「え？ なんで『テー』トに誘つか？ ですか？」

いつもの飲み屋【はなしのぶ】にて。現在午後8：30。

「うん」

「そこ」に男がいるからでしょうー。」

「・・・・」

「そ、そんな睨まなくつたつていいじゃないですかー」

「で？」

「というかいきなりビンタかましてんだからそりやお詫びのスリーセブンファイバーフレッシュ？」

「やっぱそーなの？」

「ん～せつかく知り合いになつたんすよ？ キョウ君すつゞくいい人っぽいじゃない？」

「まあたしかにいい人っぽいな。というかいい人だし。頭いいし。料理うまいし。しつかりしてるし。お人好しだし。ん～」

「つーか先輩それつて・・・」

「ん？」

「いやあ。誘つべきだなあと」

「やつなんだよなあ」

それから小春は悶々としていた。

「デートに誘えない。誘えない誘えない。

それからなぜか恥ずかしくてメールも打てなくなつた。

悶々悶々悶々モン・・・

「だあああああつー当たつて砕けろだー！」

でも砕け散つても元に戻れるほど若くはない。

25歳。精神的にも社会的にもそこそこ立場や面子が出来上がりつてしまつ年齢ではあるが、なんとなくまだまだマッシュな恋に夢を見てしまつある意味で【脂の乗つて来た】時期なのかもしれない。

まあそんなことは置いといて。

「くつそーー恋だのなんだのしたこたねーから、デートになんて誘えねえー！」

そして再び悶々悶々。ベットに寝ながら顔をつづめて悶々・・・

誘つなら今日だ。今は10:20分。まだ迷惑には当たらない時間
なのは、社会人の常識的なものなのかもしれないが。

from:翌檜小春

to:菖蒲今日一

件名:小春だ

明日、この前のお詫びがしたい。9時に駅前集合。

「・・・味気ないかな?でも顔文字なんて使ったことないし。電話
なんて不可能だし」

ん~ここは悩むべ。

送信のボタンを押しかけながら、再び思索する。

from:翌檜小春

t o · 葦蒲今日一

件名・小春です

このまえのお詫びにゴートーしない?

返信なるべく早くオネガイね?

「ん~・・・軽すぎるとか?でも絵文字は使ってないし・・・」

fron · 窓檜小春

t o · 葦蒲今日一

件名・小春

先日は大失態してしまって迷惑をおかけしました。申し訳ありませんでした。

そのお詫びと申立ては、かえって「迷惑になるかもしけませんが、
ご一緒にお食事になに行つてはもうあせませんでしょ」つか。

お返事、お詫びがあるとおもひっこりで、お待ちしております。

「・・・悩むねえ」

うんうん唸つても、どんなにメールを打つても、保存してしまうだけ決定打がでない。

まるでそう、ストッパー川原にたよりきついていた原監督が、次の年もワンパターンで乗り切ろうとしたが通用せず、二年で監督を後退してしまつたような、あるいは松井の穴を埋められなかつたかのような、そんな気分だつた。

と、そこへ我らが由紀さん登場！－！－！

「泊まりに来てるのだあ」

そうなのだあ！

「誰に言つてんだ？」

「ポール」

ええ？僕。ボーリなの？

「ふい！。いいお湯だつたつズラ～」

火照つた頬に、濡れた髪。大きめの小春さんのパジャマをブカブカにしながらほつこり笑う由紀さんは・・・たまらなく・・・ああ・・・ボンバイエ！

「先輩！お先しましたー」

「ん？ ああ・・・」

「あついなんですか？ メール？ めずらし！ 先輩がメールなんて何年ぶりですか？」

「おまえこんなにピチチ女子高生捕まえて何言つてやがる？ メールが本業みたいなもんよ？ 職業、メールよ？」

「あらまあ！ こんなに老けた娘いたかしら！ あなた、三十代ですか？ つて言われない？」

「よくみるこのハリのある肌を！ 節穴なんじゃねえか？」

「えー、おばちゃんにはハリを刺しても元に戻りそうにないシワしか見えなーい」

「てんめえ！」

「あやーー！」

プロレス開始・・・20分後

「ふう、ふう、とにかく、思春期ど真ん中ホーッムラン、やりました男・新井本シーズン初ホームランの女子中学生じゃないんだから！」

「はあ、はあ、でもなあ・・・」

「ああもう！ ポチつとな」

送信ボタンをペッ（ポチ？）ンと押しちゃった由紀・23歳。

「だいい丈夫ですよ先輩！さつきの文面ならバツチシダつて！」

恐る恐る、まさか……いや、でも……ひと携帯をチラ見すると、

送信完了・三件

この夜、最近と言つてもすでに築6年のマンション【阿頬耶ルピナ

ス2号館】に、一つの奇声が木霊したのは、ヤマビコさんではなく、マネックさんでもなく、702号室の一人からだった。

続く

俺ってポールなのかな?

ま、いつか。

でも苗字が・・・んー

続く

Q5・おじいちゃんの隣で誰かに頼りあわせたよね？（後書き）

今回は、なんなんと！今日一たちが使用する建物の紹介です！少し多いので何科かと花言葉とかんたんな紹介だけで・・・。

【都忘れ】

キク科・日本原産・濃紫・淡紫・紅・白

花言葉 懇い

喫茶店

今日一がバイトするこの話の中心。たまに場とも重つ

【はなしのぶ】

ハナシノブ科・ヨーロッパ原産・紫

花言葉 来てください

飲み屋（居酒屋）

小春と由紀の行きつけ。このマスターは由紀びいき

【ルピナス】

マメ科・地中海沿岸、北アメリカ原産・白

花言葉（白のみ）常に幸福

マンション 阿頬耶ルピナス一郎館

小春の住むマンション。2レド。七階建て。築6年

【ゼラニウム】

フウロソウ科・南アフリカ原産・白・桃・緋紅色・橙・紅紫・紫

花言葉 決心、君ありて幸福、眞実の愛情

小中高大一貫校 私立ゼラニウム学園高等部

今日一達の通う学校。4年前に開校。部活が多い。行事も多い。だから人気も馬鹿みたいに高い。

Q6・…がいつまで今日が終わるまである？（記憶）

第一章・完

まだ早かつたつすね。すんません。

Q6・めぐらへ今日が終わるですかね?

「あ、メール」

「お兄ちゃん、次お兄ちゃんの番だよー。」

「んーちょっとまつてね。・・・三件も・・・あれ? 全部小春さん?[?]」

「もーー先すすめとくよーキヨウー?」

「おいおい、瑠璃、飛ばしちゃつたら楽しくないだろ?」

「えーだつたら一回休みだー!」

「勝手にルールを増やすなよ? まつててもうじやないの? ククッ」

「だーね。けつじつ一大事?」

「何の話? ねえなんの話? ワタシワカンナーハーイ」

ゾワッ

「明日か・・・定休日だし、大丈夫だね。」

「殺す！お前をここで殺す！」

ビシッ

「殺される前に殺す！」

ドスツ

「殺される前の前に殺す！」

バヌツ

「殺される前の前の前に殺す！」

グワシッ

拳と拳が飛び交う中、確かに一人は時の流れを感じた。

無意味すぎる感。戦場と化すマンション。一人の戦士は己のために。もう一人の戦士も・・・やつぱり自分のために。

「ハア・・・ハア・・・どうやら万策尽きたようだなあ由紀い？」

「ならいいで・・・決めるあああああー！」

着信一件有り。

「・・・・・

「・・・・・

ズサアアアアアアアアアアアアアツ

ヘッドスライディングでビーチフラッグ。ギリギリの勝負を制した
のは・・・YUKI - KASIWA！

「えええ？そこ私じゃね？むしろ私じゃね？」

「んー私も今そう思います。ハイ」

結局小春に戻される携帯。無意味ここに極まれりだなど。

「えーっと・・・・

from・菖蒲今日一

to・翌檜小春

件名・Re・小春

いいですよ。お弁当作つてこきますから、入れてほしいものがあつたら教えてくださいなー。

「あやあきやあ！なにこのかわいいメール！先輩、なにたべたいんでちゅか～？」

「ん～返信の内容なんにすっかな」

「おおうスルーかよ」

from：翌檜小春

to：菖蒲今日一

件名：Re2：小春

甘く焼いた卵焼きと唐揚げ！

「ああ・・・末期だ」

「あ、祭！僕飛ばしちゃつていいよー」

「ん？なんかすんのか？」

「明日の準備？」

「なんだ？弁当かい？まあでもキョウのお弁当は～ポイント高いよね～」

「ははーん。了解だ。なんか俺も手伝つぜ?」

「いいよ別に。大したことないし」

「ばーろう！俺の大事な坊主の初めての異性間交友なんだぞ？祝わなくてどうする？なあ瑠璃！」

「そ、だよ！ やつぱー 女の子はイイモンダズH？」

「ああ。まつたくだズエ！」

「いや、おまえらが言つてなんか別のもとに聞いれたる」

「お兄ちゃんがデ、デ、デーートウ！？」

「あ、綾乃忘れてたね！」

「アノオンナね。アノオンナなのネ」

ズゴゴゴゴゴ

「ドロボウネ」「ドロボウネ」「ドロボウネ」・・・・・

一気に部屋が氷点下を振り切った【ほつきょくのせかい】へと化す。

「あ～綾乃？俺ら映画のチケット持つてんだよ。なあ？瑠璃？」

「そ、そ、そ、！ ち、よ、う、ど、明、日、公、開、な、ん、だ、～、！ ～、！ 一、緒、に、見、行、～、」う、よ、？」

「ドロボウネ」「ドロボウネ」「ドロボウネ」・・・

「綾乃。ひさしごりに映画見たら?」

「最近行つてなかつたろ？ラブコメ映画だしさ」

「そうだ世綾乃！お兄ちゃんもこう喜んでるんだし」

「もしかして、お兄ちゃんに迷ひのかな？」

黒いぞ瑠璃。

「ぐつ・・・わかつた！ 映画に行くわよ！」

「綾乃の分のお弁当も作るよ。なにが食べたい?」

「甘く焼いた卵焼きとから揚げ！」

「了解」

「瑠璃じゃないって！」

それから一時間、綾乃の瘴気に当てられ続けた瑠璃と祭は・・・激しい腹痛と幻覚に襲われたのは・・・また別の話。

「つーか弁当作りすぎたか?まあいいか。祭たちが食つだらうつー。
いや、小春さんが食いそつた気がするな」

朝も6時からせつせと弁当作りに励む今日一。

4つ並べたお弁当・・・つてほとんど重箱やんーと、自分用のお弁当（それでも一般男子高校生サイズ）を手に持つたまま、おにぎりとおかずを詰めていく。

「僕が食べなれ過ぎんのかな?」

「いいえ、他が食べすぎなんです。」

「オハヨウーマイスクイートボーライキョウウ

「気持ち悪いからやめろ」

「ちなみに俺と瑠璃はここ菖蒲家に泊まつたのだーもうひみつきヨウ」と同じ布団で・・・」

「たのむからせひで顔を赤らめないで・・・」

「顔がズバズバけていい分、そっちの方向にも十分に対応してそつた雰囲気を持つ祭。いやーん

「まあとこかく、今日は特にやーな。最近はもう俺が起こさないと起きなくなつてゐるのに・・・しかもキッスで」

あることない」と「あることない」と

「つーか最初からねーよー」

「キョウを朝からからかった」とだし、朝飯でも作るかな?」

弁当を作ったにしては片付いてるキッチン（家事レベルも高め）
（18歳）に男一人。

「・・・はあー。たのむ。」

「何が食いたい？」

「純和食しか作れないんだから、メニュー聞かれても答えようがないよ」

「でもお前みたいに全世界の物作れるやつもあんまいないと思つて
？俺は」

「まあ、バイト歴長いからなー。でも祭だつて和食はバイトで覚え
たんだろ？」

「一緒に住みなよ・・・自分で覚えたんだ」

「初耳ー。いまの初耳ー。」

「初めて言つたんだよ」

苦労人の今日一は、いつもどこかで大人の自分を作つてゐる。

今まで学校で友達と戯れるよりも、大人に囮まれた社会の中で長く生きてきたためなのかもしれないし、養うことを誰よりも早く始めているからかもしれない。

でも祭と、瑠璃と、綾乃といふときは年相応の態度を垣間見せる、素の菖蒲今日一になる。

優しくて、おっちょこちょいで、バイトと家事がもはや趣味の、皮肉屋で少し歪んだ高校3年生。

それがキヨウなのだと、祭はこのとき思つていた。

大人なのは、祭りの方かもしれない。

一人のいるキッチンにも、少しずつ朝焼けが入り込む。今日という日のはじまり。

デートのはじまり。

Q 『…がひへ今日が終わるですかね？』（後書き）

えーっと、あらためて、完！

次は一応データー新キャラまでと考えております。

今回、なにも紹介するものが無い…と思いつい、焦り気味でござります。

そ・し・で・

超・番外閑話休題！

友情戦士マツリックス

の予告でも・・・

私立ゼリーグム学園は平和な学園だった。

温かいお皿をまの下、今日も健やかに眠る祭は、生物室の異変に気付く。

熱いハートと部活動と、奇跡の技術が交錯したとき、彼は新たな戦士をその眼で見る。

第一話『ナマモノ、アラワル』

ちなみに、少し前（土地の所有に気づいてすぐ）の話になつています。

お楽しみにん

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5436d/>

明日のススメ

2010年10月12日01時39分発行